

古代エジプトの「二柱のマアト」

——概念の変遷とその実体をめぐって——

肥 後 時 尚

【要約】「二柱のマアト」は、古代エジプトに固有の抽象概念マアト(𓄿𓊖)の特殊な神格化である。この二柱の女神は、「死者の書」の核心部分である死者の裁判の場面に登場し、長きにわたり古代エジプト人の思想に影響を与え続けた。「二柱のマアト」の実体や変化の理由の理解を目指す研究は「死者の書」の記述や図像の分析を中心に継続されてきたが、未だ見解の一致をみていない。

このような背景から、筆者はこれまでに「死者の書」が登場する以前の時代の史料に遡り、エジプト古王国時代から中王国時代にかけての「二柱のマアト」を意味する語𓄿𓊖の抽出と各事例の分析を進めてきた。本論説では、これらの成果を基盤として、𓄿𓊖の語が示す意味と限定符の特徴の比較を通して𓄿𓊖の意味の変遷を考察する。そして、「コフィン・テキスト」上の神々の同一関係を示す記述に注目し、中王国時代までに形成された「二柱のマアト」の実体解明を試みる。

史林 一〇四巻三号 二〇二二年五月

はじめに

古代エジプトのマアト(𓄿𓊖)は、古代エジプトの特殊な抽象概念である。これは、「宇宙の秩序」という意味を中心として、正義、公正、真実といった様々な意味を包摂し、古代エジプトの三千年の歴史のなかで絶えず社会の秩序を維持する役割を担っていた。王朝史や文化史に関わる膨大な数の史料に記述されるマアトは、世界のあるべき秩序や王の神的属

性、民衆の道徳的・倫理的精神のような複数の側面を併せもち、古代エジプトの歴史のなかでも特異な概念であった。この概念がもつ広範な役割とその重要性から、マアトはエジプト文化史研究の中心に位置づけられ、十九世紀末から現在にいたるまでこの概念の理解の深化を目指す研究が継続されている。

このようなマアトの重要な側面の一つとして、「マアト女神」と呼ばれるこの概念の神格化が挙げられる。この女神は、頭にダチヨウの羽根を載せた一柱の女神の姿で描写される。エジプト古王国時代（紀元前二十七世紀～二十二世紀）には既にこの女神の姿が確認され、その後古代エジプト史の最末期にあたるギリシア・ローマ時代（紀元前四世紀～後四世紀）までの長きにわたって様々な史資料に描写された。その一方で、エジプト新王国時代（紀元前十六世紀～十一世紀）になると、マアト女神は、「二柱のマアト」(mꜣꜣt)と呼ばれる二柱の女神として図像で描かれ、エジプトの「死者の裁判」の場面において重要な役割を担った。本来一柱である女神が二柱の女神の姿に変化する事例は、エジプトの宗教においても極めて稀であり、変化の理由やそれぞれの女神の役割に関する多様な解釈が研究者によって提示されてきた。^①しかしながら、「二柱のマアト」の実体をめぐる議論は依然として最終的な結論に至っていない。その主たる理由には、先行研究における研究対象が「死者の書」を中心とするエジプト新王国時代以降の文献史料の分析に依拠していた点が挙げられる。エジプト古王国時代や中王国時代（紀元前二十一世紀～紀元前十七世紀）の史料上の「二柱のマアト」の実体はこれまで十分に検討されていない。そのため、中王国時代以前の史料に遡る考察は、多様な「二柱のマアト」の姿の根源を探るうえで重要な課題となる。

このような背景から、筆者はこれまでの研究において、「二柱のマアト」の実体を解明するため、「死者の書」が普及する新王国時代以前の史料上の「二柱のマアト」を意味する語 mꜣꜣt の分析の課題を提示した。そして、エジプト古王国時代の「ピラミッド・テキスト」、「パレルモ・ストーン」、中王国時代の「コフィン・テキスト」に記された mꜣꜣt (古期エジプト語の mꜣꜣt の双数形)^②と mꜣꜣty (中期エジプト語の mꜣꜣt の双数形) の記述を中心として「二柱のマアト」の内容を検討した。^③

「ピラミッド・テキスト」と「コフィン・テキスト」、「死者の書」は、いずれも古代エジプトの葬祭文学と呼ばれる史料群に位置づけられる史料である。葬祭文学とは、死後の復活や来世での安寧を目的として利用された呪文の総称であり、古代エジプトの文献史料のなかで最も豊富な数量と種類を誇る。葬祭文学は古代エジプトの葬祭文化と密接に結びつき、古代エジプト史のおよそ全時代を通して利用された。その際、葬祭文学の内容や使用者の社会的階層などは、各時代の変遷に伴い大きく変化している。そのため、古王国時代の「ピラミッド・テキスト」や中王国時代の「コフィン・テキスト」、「新王国時代の「死者の書」をはじめとする異なる時代の史料間での比較研究が可能となる。しかし、葬祭文学には宗教的・神学的な表現が多く含まれており、その内容が極めて難解であることから、葬祭文学の翻訳や解釈を目的とした基本的な史料研究の蓄積は大きく不足している。新王国時代以前の「二柱のマアト」の記述は葬祭文学に集中しているため、本論考においても史料の解釈に留意しつつ「ピラミッド・テキスト」および「コフィン・テキスト」を中心に扱う。「パレルモ・ストーン」は、古代エジプトの初期王朝時代から古王国時代の歴代の王の事績を示した最古の年代記であり、エジプト史研究における重要な史料に位置づけられる。この史料上には、 $m^i h$ の双数形の記述が確認され、「二柱のマアト」の実体を考察する重要な史料である。

各史料上の記述の分析の結果、筆者はエジプト古王国時代から中王国時代にかけての $m^i h$ / $m^i y$ の語が以下の三つの側面を示すこと明らかにした。

- ① 冥界の神ソカルに関連する一隻の船としての側面
- ② 死者の復活に携わる神的存在としての側面
- ③ 太陽神の二隻の船としての側面

新王国時代の「死者の書」において図像で示される神々「二柱のマアト」は、これらの *mꜥꜥ*/*mꜥꜥꜥ* の②の側面を示している。しかし、古王国時代における *mꜥꜥ* の記述の多くは①もしくは③の側面を示す傾向にあり、②のような神的存在としての側面の可能性を示唆する事例は、「ピラミッド・テキスト」呪文第二六〇番に確認されるのみである。

古王国時代における *mꜥꜥ* の理解を目的として、筆者は「パレルモ・ストーン」と「ピラミッド・テキスト」上の *mꜥꜥ* の語に付記された限定符に注目し、エジプト古王国時代における *mꜥꜥ* の概念の実体を考察した。その結果、「パレルモ・ストーン」上でソカルに対する祭に関連する一隻の船であった *mꜥꜥ* が、その後「ピラミッド・テキスト」の事例に確認されるような太陽神の二隻の船としてテキストの書き手（書記）に再解釈され、語の認識が変化した可能性を提示した。

本論説では、この研究を進展させ「二柱のマアト」の通時的な理解を深化させるため、古王国時代と中王国時代の史料上の *mꜥꜥ*/*mꜥꜥꜥ* の内容を整理する。そして、各事例が示す語の意味と付記された限定符の比較を通して、古王国時代から中王国時代にかけての *mꜥꜥ* および *mꜥꜥꜥ* の概念の変遷を考察する。^④

古代エジプト語の単語の多くは、限定符 (Determinatives) と呼ばれる記号を伴う。これは通常、語の末尾に記述される一つあるいは二つ以上の記号であり、語のもつ一般的な観念を示す役割をもつ。複数の種類の限定符が使用される語も数多く存在し、マアトの概念を示す *mꜥꜥ* には、抽象概念であることを示す限定符 (𓄿) や、ダチヨウの羽根を頭につけて座した女神 (𓄿𓏏)、同じく羽根をつけ、杖を携え直立する女神 (𓄿𓏏𓏏)、ダチヨウの羽根の限定符 (𓏏) など、様々な種類の限定符が用いられる。限定符の利用に差異が生じる理由には、当時の思想的背景や史料の種類、記述者の意図など様々な理由が推察されるが、抽象概念を意味する語に付記される限定符の差異は、文脈中で示された語のイメージを特定する手がかりとなる。この点に注目し、先述の「パレルモ・ストーン」および「ピラミッド・テキスト」で示された *mꜥꜥ* の語について、アンテスはこれらの語に記された限定符が同時代の史料上で太陽神の船に用いられる文字と同種であるとし、初期における *mꜥꜥ* が祝祭や太陽神に関連する船であったと指摘している。^⑤ このようなアプローチは近年の抽象概念の研究

においても応用され、各語の示す限定符に注目し、語のもつニュアンスを特定する研究の有効性が証明されている。^⑥

mꜥꜥ/mꜥꜥyの側面①冥界の神ソカルに関連する船、③太陽神の二隻の船の両側面の相関関係については、別稿で考察した通りである。^⑦本論説は、後の時代に明確な女神として登場する「二柱のマアト」との関連を示す側面②に焦点を置き、同側面に関連する限定符の分析を通して古王国時代から中王国時代にかけてのmꜥꜥ/mꜥꜥyの概念の変遷を考察する。これにより、新王国時代の図像に描写される「二柱のマアト」のような独立した神的存在としてのꜥꜥꜥの認識が中王国時代に既に存在していたことを明らかにする。そして、時代的変遷を理解した上で「コフィン・テキスト」に描写される神々の習合関係の精査から神的存在としてのmꜥꜥyの実体を解明する。

① 「二柱のマアト」の研究史については、Higo 2019, 443-445を参照。

② Edel 1955, 93, 123-124.

③ 各史料の読解と翻訳、解釈については、以下で詳細に議論した。

④ 「パレルモ・ストーン」: Higo 2019 「ピラミッド・テキスト」: 肥後 2020 「コフィン・テキスト」: 肥後 2018。

⑤ mꜥyの語の多くは各種の葬祭文学に記述されるが、これらの史料は神話的・宗教的な記述を多分に含むことから、mꜥyの記述を含む史料の文脈の正確な理解は容易ではない。それぞれの記述の意味の特

定に至るまでの各種の史料解釈の詳細についても同様に各拙稿を参照された。

⑤ Anthes 1957.

⑥ 例えば Goldwasser 1995; Nyord 2009; Zago 2018。このような限定符に基づく語のイメージを特定する分析は認知言語学の領域に含まれる (Zago 2018, 205-209)。

⑦ Higo 2019.

2 神的存在としてのmꜥꜥ/mꜥꜥy

前章の側面②で述べたような神的存在としての側面を示すmꜥꜥ/mꜥꜥyの明白な記述は、古王国時代から中王国時代を通して少ない。先行研究において、神的存在としてのꜥꜥꜥの初出は、「ピラミッド・テキスト」の呪文第二六〇番であるとされてきた。しかし、ここで記述されたꜥꜥꜥの記述には、限定符が付記されていない点や文脈の不明瞭さから、「二柱のマアト」女神の初出であると断定する点には議論の余地が残される。^①「コフィン・テキスト」においてもこの側面②を

明確に示す事例は少なく、テキストの内容からこの側面の特徴を捉えることは難しい。その一方で、「コフィン・テキスト」の *mnjy* の語に付記された限定符には、数多くのマアト女神の限定符が記される。これらの史料上の *mnjy* の記述に付記される女神、もしくは女神に関連する限定符を表1に整理した。^②

古王国時代の史料とは対照的に、「コフィン・テキスト」に記された *mnjy* の限定符には豊富な種類の限定符が確認される。船の限定符を伴う呪文第九九五章(表1…事例9)の事例を除く全ての「コフィン・テキスト」上の *mnjy* の語にはマアト女神の限定府、女性の限定符、あるいは男神の限定符が付記される。^③これは、*mnjy* の語がエジプト中王国時代において二柱の神、またはマアト女神の姿を持つ神格として認識されていたことを示唆する。

ここで注目すべきは、文脈上明らかに「二柱のマアト」に関連する側面②に該当しない *mnjy* の記述にも、マアト女神や女性、男神の限定符が記されている点である。例えば、①冥界の神ソカルに関連する船としての側面を示す表中の事例1、2、3は、それぞれ男神の限定府と双数(もしくは 𓂏 の音価)を示す二本のストローク(𓂏 、二柱の男神 𓂏)、マアト女神と双数を示す二本のストローク(𓂏)の限定符を伴う。一方で③太陽神の二隻の船としての側面を示す事例7、8には、マアトの羽をつけたミイラに類似した記号と二本のストローク(𓂏)、二人の女性(𓂏)が付記される。ソカルや太陽神の船として *mnjy* が記述される場合は、本来であれば事例9のように、船の限定符が付記されるはずである。実際に、古王国時代の史料上では、側面①や③を意味する語を示す *mnjy* の記述の多くに船の記号が使用されている(表1…事例A-E, H-J)。これらの船の限定府は、太陽神の昼の船(*mnjy*)や夜の船(*mnjy*)のような、特殊な聖船にのみ用いられる記号であり、 𓂏 がソカルや太陽神の信仰に関係する船であったことを示している。^⑤しかし、「コフィン・テキスト」では、船の限定符は事例9に確認されるのみであり、その他の記述には、*mnjy* の語の示す側面にかかわらず、マアト女神や神、女性の限定符が付記されるのである。

これらは、単純な限定符の「誤記」として認識すべきなのだろうか。古代エジプトの葬祭文学の多くは、同一の呪文で

表 1 古王国時代から中王国時代の史料上の m^{ty}/m^{ty} の側面と限定符

	事例番号	史料	関連する側面	限定符※	テキスト	限定符	テキスト
古王国時代	A	PS r. II 7	①		PS		
	B	PS r. III 6	①		PS		
	C	PS r. IV 6	①		PS		
	D	PS r. IV 12	①		PS		
	E	PS v. V 2	③(or ①)		PS		
	F	Pyr. 317a	②	—	W		
	G	Pyr. 317b	②	—	W		
	H	Pyr. 1315a	③		P		
	I	Pyr. 1785b	③		N		
	J	CG 1403	①				
	K	L. 361	③		Ibi		
中王国時代	1	CT 6, 280b	①		P. Gard. II		
	2	CT 6, 42a	①		P. Gard. II		
	3	CT 6, 282f	①		B1Bo		
	4	CT 6, 282e	②		B1Bo		
	5	CT 5, 250a	②(?)		B2Bo B4Bo		S2Cb
	6	CT 2, 250b	②(?)		S1P S1 Chass (S2Ce)		S1Cb
	7	CT 6, 312o	③		B1Bo		
	8	CT 6, 326p	③		B15C		
	9	CT 7, 210o	③(?)		P. Gard. II		
	10	CT 7, 268a	m ^{ty} の異形(?)		B1C		B3L
	11	CT 7, 279c	m ^{ty} の異形(?)		B1C		B3L
	13	CT 6, 262g	不明瞭		D1C		

※ A～D の記号は表意文字あるいは省略記号として記述

側面① 下界の神ソカルに関連する一隻の船としての側面

側面② 死者の復活に携わる神的存在としての側面

側面③ 太陽神の二隻の船としての側面

あっても書写された史料によって記述内容や語の記述方法のバリエーションが多いことで知られる。各木棺資料上の「コフィン・テキスト」には、記述するテキストの基となる原本が存在し、それを書き手（書記）が木棺に書き直す作業を経て記述される。この書き直しの際、書き手にはテキストの内容を木棺資料上の行数やスペースに応じて変化させることができる。^⑥この過程で生まれる記述のバリエーションは、原本の理解の誤りや誤記といった「改悪」として研究者に受け入れられる傾向にあった。^⑦しかし、ウィレムズは、バリエーションが必ずしもこれらの結果として生じるだけでなく、テキストの意図がより明快に理解されるための書き手の独自の「改善」の結果を示すこともあるという点を強調する。^⑧これは、テキストを木棺資料に記述するにあたって、書き手は原本の内容を機械的に書き写したのではなく、呪文の内容を自身で解釈したうえで記述していることを示している。各木棺資料の「コフィン・テキスト」上で船の限定符の代わりに記述された *my* のそれぞれの限定符も同様で、一概に「誤記」であるとはいえず、意図的な記述の可能性も考慮されるべきである。

以上の点をふまえ、筆者は古王国時代に *my* の認識の変化があったことを指摘したが、本稿ではその後の「コフィン・テキスト」の時代に *my* の語に二度目の認識の変化が生じた可能性を指摘したい。筆者は別稿において、「パレルモ・ストーン」と「ピラミッド・テキスト」 *my* の記述から、最初期の段階において二羽の隼を載せた「一隻の船」であった同語の認識が「二隻の船」として変化した可能性を提示した。^⑨この初期の語の変化に続いて、*my*/*my* の語に新たな認識の変化が生じたことが「コフィン・テキスト」から示唆されるのである。先述の通り、「コフィン・テキスト」が木棺資料に記述される過程には、原本の編纂者と、それを木棺資料に記述する書き手の二者の関与があり、加えて原本の用意と木棺の記述という二つの段階が想定される。^⑩筆者は、このうちのいずれかの段階において、編纂者もしくは書き手が *my* の双数形語尾の *-y* が二つの何を表すのかについて解釈を迫られたと考える。「ピラミッド・テキスト」と「パレルモ・ストーン」に記された事例数が限定的であることから、双数形での表現が古王国時代においてエジプト人の思想

に浸透していたかは疑わしい。^⑪ 加えて、「ピラミッド・テキスト」の時代に *ḥꜥꜥ* の語の認識が既に一度変化していたことを踏まえれば、*ḥꜥꜥ* に関する一貫した共通認識が古王国時代末期に存在していたとは考え難い。「コフィン・テキスト」の多くは、エジプト古王国時代の崩壊後の第一中間期末期から中王国時代の木棺資料に記される。古王国時代末期から第一中間期の終末期にかけての約百年の間に「コフィン・テキスト」の呪文の編纂者は、本来ソカルや太陽神の船の意味で用いられる *ḥꜥꜥ*/*ḥꜥꜥ* の語を「二隻」の船ではなく、「二柱」の神格として認識したのではないだろうか。「コフィン・テキスト」の時代において、マートが既に真実や正義を司る女神として広く認識されていたことは、同史料上に記されたマート女神の限定符の類例数から明らかである。^⑫ ソカルの船や太陽神の船を示す *ḥꜥꜥ* の語の双数形の含意が正確に伝えられていなかったと仮定すれば、後の時代の原本の編纂者やテキストの書き手が、*ḥꜥꜥ* の語の含意を当時に浸透していた女神であり、同じ音価 (*ḥꜥ*) と表記をもつマート女神の数と混同して認識した可能性は十分に考えられる。つまり、文脈上明らかに船としての側面を示しながらも、船の限定符を伴わずにマート女神や神格の限定符が付記された「コフィン・テキスト」上の複数の *ḥꜥꜥ* の記述は、このような長い時間を隔てた宗教的な語彙の認識の変化の結果であるといえよう。史料や事例数が限定されていることから、断定することはできないものの、この解釈は「コフィン・テキスト」上の *ḥꜥꜥ* に付記された限定符の傾向と、それ以前の史料に記された限定符からの変化とも矛盾しない。

古王国時代から中王国時代にかけての同様の抽象概念のイメージの変化は、その他の概念にも見受けられる。ザゴは、「冥界」を意味するエジプト語 *dwt* の概念の形成過程を探究するため、「ピラミッド・テキスト」と「コフィン・テキスト」の *dwt* に付記される限定符の相違を確認した。^⑬ 「ピラミッド・テキスト」には一貫して星や天の世界の意味を示す限定符 *や ㊦ が付記されている点に対し、「コフィン・テキスト」の記述にはこれらの記号に代わって、家や住居といった居住の場を示す記号 ㊧ が用いられる。彼女によれば、この限定符の変化は、古王国時代において太陽や星が存在する天の領域として理解されていた *dwt* の観念が、中王国時代には死者が復活のために通過する神々の居住地として理解される

ようになったことを示している。加えて、彼女は「コフィン・テキスト」と一部の「ピラミッド・テキスト」の双方が記述された中王国時代の木棺資料において、「ピラミッド・テキスト」の *dwꜥ* に付記される限定符 *・⊗ の多くも同様に「の限定符に書き換えられている点を指摘している。¹⁴ これは、木棺に記述する前の原本に記されたであろう *・⊗ の限定符が木棺資料の書き手によって意図的に「へと変更されたことを示す点で注目値する。

また、エジプト語で「集める」を意味する動詞 *ḥꜥ* の限定符にも「ピラミッド・テキスト」と「コフィン・テキスト」の間で特殊な変化が看取される。前者の *ḥꜥ* の語において付記される抱擁する両腕の限定符 *Q* が「コフィン・テキスト」の多くの同語において、尾部を内側に曲げたワニの限定符 *W* へと置き換えられているのである。この記号はワニの凶暴性に由来する敵意や攻撃性の意味を示す限定符として利用され、「集める」という動詞の意味と合致しない。¹⁵ ゴールドワッサーは、「コフィン・テキスト」におけるこのワニの限定符の利用は、オシリス神話におけるワニの肯定的なイメージに由来すると指摘する。¹⁶ ワニは、凶暴性をもつ動物と同時に、神話において散乱したオシリスの骨を集め、復活を援助する動物としても認識されていた。「コフィン・テキスト」におけるワニの限定符の登場は、このワニの肯定的な側面が中王国時代に浸透した結果であるとゴールドワッサーは考察する。¹⁷ これらはいずれも、古王国時代から第一中間期・中王国時代における思想の変化が限定符に表象された事例であるといえるであろう。*mꜥ* / *mꜥꜥ* の限定符もまた、このような思想の変化を示す一例に位置付けられるのではないだろうか。

「コフィン・テキスト」の *mꜥꜥ* の事例は、この語を二柱の女神や神々とする認識が第一中間期から中王国時代に普及しつつあったことを示唆していた。*mꜥꜥ* を二柱の神々として描写した事例は少ないにもかかわらず、*mꜥꜥ* の語には積極的にマアト女神や女性、男神の限定府が付記されている。なかでも、太陽神やソカルの船として記された多くの *mꜥꜥ* の限定府の変化は示唆に富むものである。古王国時代の「ピラミッド・テキスト」では、太陽神の船として刻まれた *mꜥꜥ* の語は、太陽神の日中の船 (*mꜥꜥ*) や夜の船 (*mꜥꜥ*) に利用される特徴的な船の限定府 (表 *ꜥꜥ*) を伴う。しかし、文脈

上明らかに太陽神やソカルの船を示す「コフィン・テキスト」上の *mnw* の記述の多くには、船の限定府の代わりに男神やマート女神の限定府が付記されている。これは、原本の編纂者や木棺の書き手が、*mnw* を船ではなく二柱の神々や二柱のマート女神として認識していた可能性を示している。以上の点をふまえると、「コフィン・テキスト」が利用された第一中間期から中王国時代は、古代エジプト人の思想において *mnw* の語が二柱の神々や女神と認識されたことを示す最初の史料であると考えられる。そして、この認識がその後の「死者の書」で図像化されるような明確な「二柱のマート」の実際の祖型となったことが推察される。

① 呪文第二六〇番上の *mnw* の解釈をめぐる議論については、Higo 2019, 445-446 および肥後 2020, 2-6 を参照。筆者はこの呪文における *mnw* は、神的存在であるものの、「二柱のマート」と同一の存在であると断定できないという立場に立っている。

② 「コフィン・テキスト」上の *mnw* の分析と側面の分類(表1: 事例1-8)は肥後 2018 を参照。呪文第六五九章の事例(表1: 事例1)については、新たな史料の考察を踏まえソカルに関連する側面を示す事例に再分類した(Higo 2019, 451-453)。呪文第四一六章、第一四九章の事例(表1: 事例5, 6)も同様に、文脈のみに基づく分類には議論の余地が残されるため、再検討を要する。

③ CT 7.210a. 「コフィン・テキスト」で唯一船の限定符とともに記述された *mnw* の事例である。前後のテキストが欠損しているため船の所有者を特定することはできないが、三人称単数男性形の接尾代名詞 *-w* を伴う点や、ラー・アトゥムが登場することから、太陽神の船を指す可能性がある(CT 7.210)。

④ デ・バックの記述を確認する限りでは、立てられたミイラの記号(Gardiner 1957, A53: 𓏏)にダチョウの羽根を載せた姿で記される(CT 6, 312a)の限定符は数あるマートの限定符の中でもとりわ

け特殊な記号であり、管見の及ぶ限りではその他の中王国時代以前の史料上には見受けられない。第二王朝のネスカパシュティのパピルス(P. Louvre. E 17401)には、この限定符に類似する図像が確認される(Prankoff 1957, Pl. 9)。

⑤ Anthes 1957.
⑥ Willems 2001, 257.
⑦ Lesko 2003, 317.
⑧ Willems 2001, 257. 一部のバリエーションを「改善」として理解すべき根拠として、ウイレムズは、同じ呪文のなかでもより明快なテキストをもつ木棺資料が、難解なテキストの記述をもつ木棺資料よりも後期に制作された例を挙げている。

⑨ 一度目の認識の変化については Higo 2019, 451-454 を参照。
⑩ 原本の編纂者 (composer) とテキストの書き手 (scribe) の関係や、両者の間で生じるテキストの変化については Husein 2017 に詳しい。
⑪ 「ヨラニッド・テキスト」の七〇〇種を超える呪文のうち、明確な *mnw* の記述が確認されるのは呪文第二六〇番、第五三九番、第六二七番、イビ王の呪文(第六二七番の異形)上の四例のみである。

⑫ 例えば、CT 1, 26b, 53c, 106a, 166b, 352d, 353d; CT 2, 27c, 139a,

- 139b, 148a, 148b, 149c; CT 3, 6a, 6b, 112j, 328g, 327b; CT 4, 21c, 21e, 87j, 90j, 170a, 254a; CT 5, 35m, 159f, 196d, 269b; CT 6, 67k, 88d, 100a, 129b, 153f, 165e; CT 7, 254e, 270b, 375c, 401b, 485b。m¹が女神ではなく「正義」や「秩序」の抽象概念として描写される際にもマアト女神の限定符は頻繁に付記される。一方で「ベラムシッド・テキスト」のm¹に関連するいずれの事例にも女神や男神、女性の限定符は見受けられなく。¹³ Zago 2017.
¹⁴ Zago 2017, 213.
¹⁵ Borghouts 2010, 73.
¹⁶ Goldwasser 1995, 103-106.
¹⁷ Goldwasser 1995, 105.

3 「二柱のマアト」の実体

前章では、中王国時代までに既にm¹が二柱の神々、あるいはマアト女神として認識されていたことを明らかにした。本章ではm¹を形成する二柱の神々の実体の解明を試みる。

字義通りに解釈すれば、m¹はマアト女神の双数形であることから、まさしくマアト女神が二柱存在すると考えるべきであろう。新王国時代以降の図像資料は実際に、二柱のマアトを同じ外見上の特徴をもつ二柱の女神として描写している(図1)^①。しかしながら、その一方で、「二柱のマアト」の図像には、同一の女神と異なる神々の一組として描写される事例も数多く確認される。例えば、通常は二柱の同一の女神として描写される「二柱のマアト」が、しばしば一柱のマアト女神と一柱の男神の一組として描写される。また、マアト女神と、頭が女性ではなく、巨大な一枚のマアトの羽根となつた女神との組み合わせや、頭に一枚の羽根を載せたマアト女神と二枚の羽根を載せたマアト女神の組み合わせ^②のような特徴的な図像で描写される。このような図像の多様性は、「二柱のマアト」が同じ性質をもつ二柱のマアト女神の組み合わせではなく、「二柱のマアト」と呼ばれる神々が一組それぞれ異なる役割を担っていたことを示している。

多様な図像で描写された「二柱のマアト」の実体については、これまでに様々な意見が提示されてきた。最初期の研究に遡れば、ブリーカーは「二柱のマアト」の実体をそれぞれ生と死のマアト女神としている。^⑤一方でヨットは、「二柱

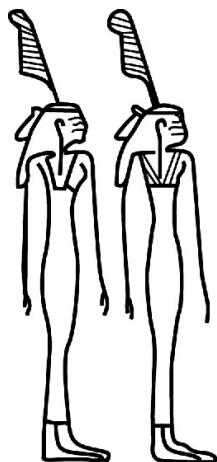


図1 「アムドウアト書」
第一時に描かれた
「二柱のマアト」

(Higo 2019, Fig. 1)

の「マアト」を太陽と月の隠喩であるとし、シーバーは二柱のマアトがそれぞれ日中の太陽の船と夜の太陽の船を案内する役割をもつ女神と述べる。^⑥ いずれの研究者も自身の仮説を支持する論拠を提示しており、各見解に明確な問題点は見受けられない。^⑦ これは、「二柱のマアト」が古代エジプトにおいて多様な神々の姿で認識されていたことに由来すると考えられる。

では、このような「二柱のマアト」の解釈の多様性はどこから発展したのだろうか。いずれの解釈の論拠も「死者の書」の図像をはじめとする新王国時代以降の史料の内容に依拠しており、中王国時代以前の「二柱のマアト」の実体はこれまで十分に検討されていない。そのため、中王国時代以前の史料に遡る考察は、多様な「二柱のマアト」の姿の根源を探るうえで重要な課題となる。この課題をうけ、本章では古代エジプトの「コフィン・テキスト」上で描写された神々の習合関係に注目する。

古代エジプトの宗教では、習合 (Syncretism) と呼ばれる一柱の神がその他の神と同一視される現象がしばしば見受けられる。^⑧ 例えば、ラー (Ra) とアトウム (Atum) はラー・アトウム (Ra-Atum) として、プタハ (Ptah) とソカル (Sokar) はプタハ・ソカル (Ptah-Sokar) として現れる。このような習合関係は、神々の名前の並記だけでなく、「オシリスがラーとして現れた」というような神々の同一関係を示す文章表現においても確認される。古王国時代と中王国時代の史料には、「*mꜣtjw* は〜である」や「〜は *mꜣtjw* である」といった明確な習合関係を示す

記述は見受けられない。その一方で、単数形で示された *mꜣtjw* の記述に目を向けると、「コフィン・テキスト」のいくつかの呪文の中で *mꜣtjw* がその他の神や神的存在と同一視されることが確認できる。さらに、これらの *mꜣtjw* の事例は、*mꜣtjw* が別の性格をもつ神的存在と対となる関係 (対関係) を形成し、かつ他の二

種の神的存在が形成する対関係と同一関係にあったことも示している。すなわち、「 $m^{\cdot}t \cdot A$ 」=「 $B \cdot C$ 」のような関係を形成しており、前者の対関係からなる一組が、「二柱のマート」の内容を示唆する可能性が推察される。アルテンミュラーは、「コフィン・テキスト」における習合研究のなかで、これらの「 $m^{\cdot}t \cdot A$ 」=「 $B \cdot C$ 」の描写が「二柱のマート」とその他の神的存在との習合関係を示す事例であると論じた。^⑩以下、この論考を参考として呪文の解釈と翻訳を通してマート女神とその他の神的存在との習合関係を整理していきたい。

事例 (一) 呪文第八十章 CT 2, 27d-32j, [B1C]

27[^d] i ḥḥ 8 l[p]w m ḥḥ n ḥḥ [^e] šnmw pt m wy.sn

28[^g] sškw pt ikr n Gb [^b] ms.n ḡn Šw m ḥḥw m nw m tmnw m kkw [^c] ip.f ḡn n Gb Nwt [^d] sk Šw m ḥḥ Tht m ḡt [^e] N b pw n Šw

29[^e] msw.n ḡm [^f] ḥbs.i pw ḡw n ḥḥ [^g] pr n[.i] ḥ:i m r n ḡm [^h] wb i n[.i] ḡww

30[^g] ḥr wṯ.i [^b] N ir sšp pt m-ḥt kkw [^c] ḡm.i pw ḥ ḡww pr ḥr-s:i [^d] m r n ḡm [^e] ḡḡw.i pw krr n pt [^f] idt.i pw nšn ḥḥw

31[^g] iw iw n pt tn n mntt.i iw wšḥ n ṽ pn n ḡḡt.i [^b] N kmḡw ḡm [^c] iw [.f] r st m ḡt [^d] N pw ḥḥ msw ḥḥw [^e] wḡmw išt n ḡm [^f] pr m r.f

dl.f ḡrt.f

32[^g] ḥt.f r sḡr n ṽ [^b] ḡḡm ḡm st.i pw ḥt Tht [^c] wms ḥt sns Šw [^d] ḥḥ m.f [^e] mṽt ms [^f] ḥḥ.i ḥn sṽy.i ḥḥ.i ḥn ḡṽy.i [^g] isk w i m

ḥr-b:snv [^b] wṯ.sny r s:i wṯ.sny r ḥt.i [^c] sḡr ḥḥ ḥn st [.i] mṽt [^d] wṽt m-ḡnw.i wṽt ḥ:i

おお、真の混沌の神々であるこれらの八柱の混沌の神々よ！自らの両腕によって天を取り囲む者たち、アケルと地をゲブのために結びつける者たちよ、シュエは混沌、原初の水、闇 (mmw)、そして暗闇 (kkw) の中で汝らを生み出した、シュエが ḥḥ の永遠であり、テフヌートが $m^{\cdot}t$ の永遠である時に、彼 (シュエ) が汝らにゲブとヌートを割り当てるために。Z (呪文の所有者) はアトウ

ムが生み出したシユーのバーである。私の衣服は、「私」のためにアトゥムの口から私の周囲に出てきた、そして「私」のために私の道の上で息を開いた生命の空気である。²¹ Zは、暗闇の後に天の光を作る者である。アトゥムの口から私の後ろに出てきた息は、私にとって望ましい肌(?)²²である。空の嵐は私の体の流出物であり、嵐の薄暗い雲は、私の汗である。²³ この天の長さは、私の歩幅に属し、大地の広さは私の敷地に属する。Zはアトゥムが創り出す者であり、彼は²⁴の永遠の座に向かっている。Zは混沌の神々を生み出した²⁵の永遠であり、アトゥムの唾液が繰り返した者であり、彼(アトゥム)が彼の手を置いた時に出てきた者である。彼の唾液(?)²⁶は大地へと落とされるだろう。

そしてアトゥムは言った。「テフヌートは私の生ける娘であり、彼女は彼の兄シユーとともにあるだろう。彼の名前は『生命』であり、彼女の名前は『マアト』である。私は私の双子とともに生き、私は私の二人の子らとともに生きるだろう、私が彼らの中央に位置し、彼らの一人は私の背後に、彼らの一人は正面にいる時に。²⁷『生命』は(私の)娘『マアト』とともに夜を過ごすだろう、一人は私の内部に、もう一人は私の周囲にいる時に。」²⁸

「コフィン・テキスト」呪文第八十章は、古代エジプトの伝統的なヘリオポリスの創世神話に密接に関わる呪文である。

この神話は創造神アトゥムの出現を宇宙の創造の始まりとする。唯一の神として最初の丘から出現したアトゥムは、自慰や自らの唾液によって大気の神シユーと湿気の女神テフヌートを生み出す。その後シユーとテフヌートが交わり大地の神とゲブと天の女神ヌウトを生み出し世界の創造がなされる。呪文七五章から第八十章は、このようなエジプトの創世神話を描写したものであり、その神話的な内容から「コフィン・テキスト」の呪文の中でもひととき特徴的な呪文に位置づけられる。²⁹長大な呪文であるため、本論説では呪文の冒頭部分からマアトに関する描写を示す範囲の翻訳の提示に留める。

呪文の内容は、混沌の神々への呼びかけにはじまり、呪文の所有者は大気の神シユーについて語る。シユーは、混沌の神々を創り出し、ゲブとヌート、つまり大地と天に割り当てた(CT 3.28b-c)。このようなシユーの重要性を述べた後、死

者は自身をシュエのバー（靈魂の一種²⁹）であると宣言する。自身の体に由来する事物（流出物・汗）を嵐や暗雲と同一視し（CT 2.30.e）、死者はシュエのバーである自らを「アトゥムが創り出した者」と称し（CT 2.31.b）、アトゥムの自慰によって発生した神であると述べる（CT 2.31.e-32a）。世界の創造が死者によって語られた後、アトゥムによる発言がなされる。そこでアトゥムは、彼が生み出した二柱の神々、シュエとテフヌートにの本質を語っている。

テフヌートは私の生ける娘であり、彼女は彼の兄シュエとともにあるだろう。彼の名前は『生命』であり、彼女の名前は『マアト』である。私は私の双子とともに生き、私は私の二人の子らとともに生きるだろう（CT 2.32b-e）。

この文章において、シュエはその名を「生命」(ꜥꜣ)と呼ばれ、それと対をなすテフヌートは「マアト」の名を持つことが明示されている。つまり、ここでマアトは女神としてテフヌートと同一視されているのである。続く文章でも、マアト女神はテフヌート、つまりアトゥムの娘として言及される（CT 2.33a）。さらにマアトと同一視されるテフヌートとシュエの關係に目を向けると、テキストの前半部分においてシュエがꜥꜣの永遠、テフヌートがꜥꜣの永遠とあるように、二者の對關係も確認される。（CT 2.38a）。³⁰ここで述べられる二種類の永遠は、いずれも古代エジプト宗教における時間の概念である。³¹ꜥꜣは通常、繰り返し回歸すると同時に變化し続ける動的な永遠であり、日々繰り返される太陽の運行と關連づけられ、現世における時間の觀念として理解される。対してꜥꜣの概念は、變化のない靜的な永遠であり、冥界における時間の觀念に相當する。この呪文のなかで、シュエがꜥꜣと、テフヌートがꜥꜣの永遠の觀念と同一視されることから、シュエが現世、テフヌートが死後の世界との關連を持つことがうかがえる。この相關關係はシュエがꜥꜣの永遠と同一關係にありながら「生命」の名前を持つ点からも強調される。死の側面を示すꜥꜣの永遠と同一視されたテフヌート女神が「マアト」の名を持つ理由については、続く三例の検討と併せて考察する。事例（i）の描写を整理すると、マアト

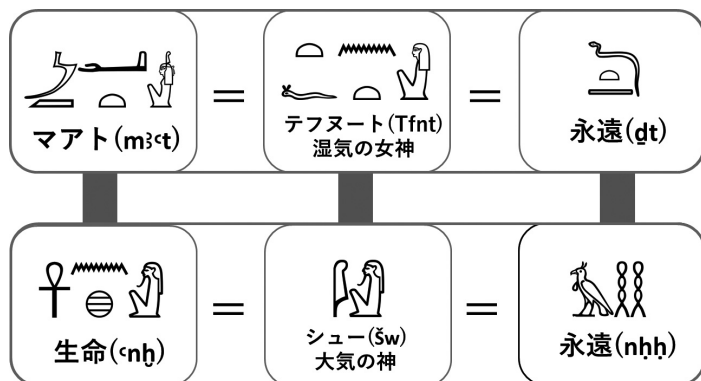
に關して下図のような相關關係が見出される。

これらの相關關係、つまり「シュー＝生命＝nh」と「テフヌート＝マアト＝dt」の關係は、同呪文における別の場面でも再び強調される。創造神であるアトウムと原初の水との對話のなかで、原初の水はアトウムに次のように語る：

sn stk m't di n.k s(y) r fndk nh b.k n hr sn r.k stk pw m't hr s.k šw nh m.f wnm.k m
stk m't in s.k šw js.f fw

汝の娘「マアト」に口づけをせよ、彼女を汝の鼻に置き、汝の心が生きるために！彼らは汝から離れていないだろう。それは、汝の娘マアトと汝の息子シュー、その名を「生命」とするものである。汝が食物とするのは、汝の娘マアトである。汝を引き上げるのは汝の子シューである(CT 2, 35c-h)。

アレンは、この呪文におけるマアトの記述をマアト女神ではなく、抽象概念として解釈している。^{③①}しかし、マアトがテフヌートと同一視されるだけでなく、度々アトウムの娘として直接的に描写されることから、ここでのマアトは女神として描写されていたと考えるべきであろう。^{③②}創造神であるアトウムの二人の子として現れたシューとテフヌートは、その他の神的存在と對關係を形成にであったことが次の事例において示される。

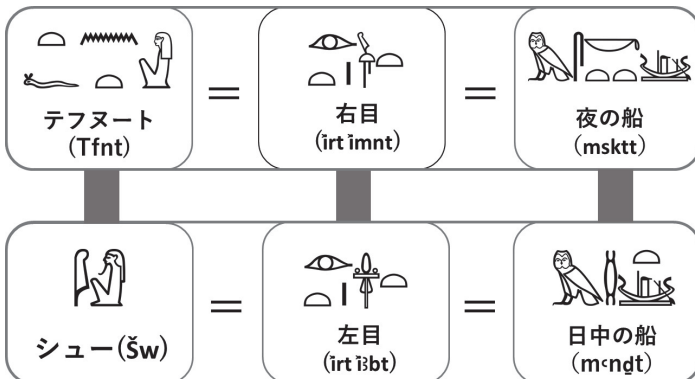


事例 (ii) 呪文第六〇七章 CT 6, 220o~220r [L2L.i]

220 [o] ir r (i)rk m-bnw gmwt [o] iw.f rꜥ ir Hr iw.ꜥ r.f ir Hr [o] irk imnt m msktt irk iḥt m
m'ndt^[r] iry.k [Hr] prt m lmn šw pw hn' Thwt

衰弱の中にいる汝（＝ホルス）の父親に対して危害を加える者、彼は汝に敵対するだろう、ホルスの目よ！汝は彼に敵対するだろう、ホルスの目よ！汝の右目は msktt の船であり、汝の左目は m'ndt の船である。アトゥムより出てきた汝の両目、「ホルス」よ！それはシューとテフヌートである。

「ホルスの目」を死者が手にすることを目的とする呪文のなかで、「ホルスの目」、「テフヌート・シュー」、「msktu の船・m'ndt 船」の三組の関係が論じられる。はじめに、ホルスの右目は msktt の船、左目が m'ndt の船と同一視される。「ピラミッド・テキスト」や、「コフィン・テキスト」「死者の書」といった数多くの葬祭文学に示される通り、mskt は太陽神が冥界を航行するための船、m'ndt は日中に空を航行するための船として登場する。右を意味する imn と左を意味する iḥt は、同時に死後の世界と現世を暗示する西と東を意味し、その右目が死後の世界、左目が現世に関連することを示す。その後、ホルスの両目は、アトゥムから生まれたシューとテフヌートであることが述べられる。シューとテフヌートが両目のいずれに相当するかについては明記されていないが、先の事例 (i) に見たように、シューが現世の側面、テフヌートが死後の世界の側面を有していることから、左目がシュー、



右目がテフヌートにそれぞれ対応すると考えるべきであろう。この呪文の内容をまとめると、下図のような関係が見いだされる。

シューとテフヌートの一組や、*m'ndt*の船と *mskt*の船の一組が、神々の神聖な目と同一視されることは、以下の二例の記述からも確認される。

事例 (iii) 呪文第五三二章 CT 6, 123i-124e [M36C]

123 [3] *iw ḥt̄k m Dhwy* [3] *wpl̄k m Wp-w'wt* [8] *iw 'nhwyk m psḏy*

124 [a] *iw itȳk [m] mskt ḥt̄ m'ndt* [b] *iw 'nhwyk m psḏy* [c] *wpl̄k m Wp-w'wt* [d] *swȳk m 'st ḥt̄ Nbt-ḥwt* [e] *mkp̄:k m Dwn-nwy* ②⑧

汝(＝呪文の所有者)の白冠はトートである。汝の頭はウプウアウトである。汝の両眉毛は二柱の九柱神である。汝の両目は *mskt*の船と *m'ndt*の船である。汝の両眉毛は二柱の九柱神である。汝の頭はウプウアウトである。汝の髪はイシスとネフティスである。汝の後頭部はドゥンアンウィである。

事例 (iv) 呪文第七六一章 CT 6, 391h-391i [TIL]

391 [b] *ḥpr:nk tm̄ti m nṯ nb* [3] *ḥp̄k m R' ḥr:k m Wp-w'wt* [3] *fnḏk m sḥ sp̄ȳk m sṯy* [k] *msḏwȳk m 'st ḥt̄ Nbt-ḥwt itȳk m sṯy* [m] *ns*
k m Dhwy ④⑩

汝(＝呪文の所有者)が生まれたのは、汝があらゆる神として完成した時なのである。汝の頭はラーである。汝の顔はウプウアウトである。汝の鼻はジャッカルである。汝の両唇は二人の子である。汝の両耳はイシスとネフティスである。汝の両目は、アトウムの双子である。汝の舌はトートである。

第五三一章では、死者の復活に密接に関係する神について、その偉大さを示すために種々の神的存在との同一関係が語られる。⁴³⁾ この神の名は呪文中で明示されないが、おそらくオシリスを指すと考えられる。⁴⁴⁾ この神の目は、事例(ii)と同様の表現で *mꜥndt* の船と *mskt* の船と同一視される。

事例 (i) から事例 (iv) で見た神々の習合関係を整理し、以下の図にまとめた事例 (i) において、テフヌートとシューはそれぞれマアトと生命と同一視され、同時に前者は *ḥt* の永遠、後者が *ḥt* の永遠と同一視される。マアトと同一視されたテフヌート女神とその対をなす男神シューは、事例 (ii) のなかでそれぞれ太陽神の船である *mskt* と *m'ndt* の対関係、また同時にホルスの右目と左目と同一視される。さらにこの聖なる両目は、オシリス、あるいはその他の神の持つ両目として事例 (iii) で *mskt* の船と *m'ndt* の船と、事例 (iv) でアトウムの双子、すなわち



テフヌートとシューとして描写される。

マアトの同一関係に目を向けると、マアトがテフヌート、*ḥt* の永遠、*mskm* の船、(ホルス/オシリスの) 右目と習合関係にあることが見てとれる。一方でマアトの対として登場した「生命」*ḥy* はシュー、*nḥy* の永遠、*mḥt* の船、(ホルス/オシリスの) 左目に合致する。ここで注目すべき点は、これらの同一関係が、必ず「二つ」の要素の対関係を基に形成されている点である。ここで見られる習合関係が言及される際には、「テフヌートとシュー」が「マアトと生命」として描写されるように一組単位で習合関係が成立しており、マアトが単体でテフヌートと同一視される記述や、マアトがそのみで *mḥt* と同一視される記述は確認されない。マアトはあくまで生命との対関係の中でその他の神的存在と同一視されているのである。

アルテンミュラーは、ここで形成される「マアトと生命」＝「テフヌートとシュー」の関係から「二柱のマアト」の実体がシューとテフヌート女神であると断定している。⁴⁶ 確かに、マアトがテフヌートであり、生命がシューであることは明らかである。しかし、「二柱のマアト」(*ḥt* と *ḥy*) の直接的な言及はこれらの習合関係には現れず、この一組のみを「二柱のマアト」と断定するには注意が必要である。加えて、アルテンミュラーの考察は、「ピラミッド・テキスト」第二六〇番上の不明瞭な神的存在の一組 (*ḥt* と *ḥy*) を「二柱のマアト」とする実証性に欠けた習合関係に基づいている。⁴⁷ そのため、ここで示した習合関係のみからシューとテフヌートが「二柱のマアト」であるとする点には議論の余地が残る。

ここで筆者は「二柱のマアト」の実体がシューとテフヌートであることを支持する別の史料を提示したい。ベルシャ出土のセビの木棺 (B10) 底面部に記された、「コフィン・テキスト」の呪文第一〇三・四章には、*nḥy* の記述が一例確認される。多くの木棺史料上において、同呪文の内容が「マアトの主」(*ḥb ḥt*) と記述されるなかで、セビの木棺 (B10) とセンの木棺 (B31) のみ「*nḥy* の主」(*ḥb nḥy*) と記述される。そして、セビの木棺上のこの *nḥy* の限定符はマアト女神の限定符と男神の限定符の一組  で示されているのである。⁴⁸ この限定符は、少なくとも古代エジプト人が *ḥb nḥy* を男神と

女神の組み合わせと認識していたことを明示するものであり、先に整理した習合関係における「テフヌートとシュー」の組を「二柱のマアト」とする解釈をアルテンミュラーと異なる視点から追認するものであるといえる。

「コフィン・テキスト」で示された習合関係に再び目を向けると、個々の組み合わせを形成する二つの要素が、それぞれ死と生の性質を持つことも推定される。*ut*と*nubt*はそれぞれ死後の世界と現世における時間の観念に一致し、右目と左目もまた、西方と東方、すなわち死後の世界と現世を指す。*nubt*は太陽神が夜に冥界を航行する船であり、*nubt*は日中に天を航行する船である。大気の神であることから生と密接な関係にあるシューに対して、テフヌートが死の側面を持つ理由については明らかではない。⁵⁰⁾

本論説の焦点となるマアトが「生命」と対関係を形成し、死の側面を示す理由もまた定かではない。しかし、筆者はここで、マアトが「生命」と対関係を形成するための望ましい条件を満たしていた可能性を提示したい。その条件の一つは、「生命」に対応する語が女性的な要素を有する点である。事例(i)の関係図に示されるように、男神シューと*nubt*の永遠は生の側面を持つ男性名詞である。対して、対関係を形成するテフヌート女神と*ut*の永遠はいずれも女性名詞である。事例(ii)の*nubt*と*nubt*のように女性名詞からなる対関係も形成されるため、全ての対関係において男性的な要素と女性的な要素の対応が必要であったとは限らない。しかし、事例(i)に示されるように「生命」に対応する概念がテフヌート女神の名前であること踏まえると、女性的な要素を含む語が求められた可能性は高いといえよう。マアト(*mt*)は女神としての側面をもつ女性名詞である。第二の条件は、「生命」に対応する概念が死後の世界に影響を及ぼす性質を備える点である。現世において不可欠であった「生命」の性質に対応する概念は「死後の世界」において必要とされる概念であったと考えられる。マアトは生前の道徳行為や倫理的な規範を規定する概念であるが、古王国時代や中王国時代の史料にはマアトが死後の世界で永続する性格が記述されている。⁵¹⁾現世だけでなく死後の世界にも存在し、死者に影響を及ぼすマアトの性質が、生命に対応する死後の世界の概念として理解される一因になったのかもしれない。以上を踏まえる

と、女神であると同時に、死後の世界においても存在する抽象概念でもあるマアトは、「生命」に対応する語として最適であり、それゆえに「生命」と対関係を示す概念として理解されたのではないだろうか。しかし、これらの推察は決定的な史料に乏しいため、マアトと死の関連については今後さらなる議論が必要である。

マアトとテフヌートに結びつく *ḥt* の永遠、*mskt* の船、右目が死に、生命とシユーに結びつく *nḥt* の永遠、*m'ndt* の船、左目が生の觀念にそれぞれ矛盾することなく同一関係を形成する点は、これらの習合関係が複雑でありながら、一貫性を伴い形成されたものであることを示唆する。この習合関係に見出される生と死の関係においても、「二柱のマアト」をシユーとテフヌートの一組であるとする仮説には、先行研究における解釈との整合性もある。ブリーカーによる「生と死」のマアト、ヨヨッテによる太陽と月、そしてシーバーによる昼と夜の船とする解釈は、結果としていずれも生と死の関係と一致するためである。言い換えれば、新王国時代の「二柱のマアト」の先行研究により導かれた「二柱のマアト」の内容の推察は、いずれも直接的あるいは間接的に中王国時代の「コフィン・テキスト」の中で描写される生と死に関するマアトの対関係に既に組み込まれているのである。

テフヌートが「二柱のマアト」のうちの一柱のマアトと明確に同一視される一方で、シユーがもう一柱のマアトと同一視される理由は、シユーの図像学的な特徴からも推察される。シユーが図像として登場する場合、彼は頭にダチヨウの羽根を載せた男神として描写される^②。この特徴は、同じく頭にダチヨウの羽根を載せたマアト女神の図像と著しく類似する。このような図像的特徴もまた、男神であるシユーが「二柱のマアト」の一柱でと考えられた要因の一つであると筆者は考える。

最後に、「シユー・テフヌート」をはじめとする神的存在の各種の対関係が「*m'ndt* の船・*mskt* の船」の一組と同一視されていることもまた、これらの関係が「二柱のマアト」と同一視された可能性を示唆している。「ピラミッド・テキスト」や「コフィン・テキスト」における *m'nt*/*m'nt* の事例のいくつかは、第一章で示した側面③に該当する太陽神が所

有する「二隻の船」として描写されていた(表1事例H、I、K、7、8、9)。m'ndtの船、msktの船も同様に、古王国時代には既に太陽神の所有する船として登場し、それぞれが日中の船と夜の船としての側面をもつ。これらの船は、多くの史料において二隻一組の船として示される。このような太陽神の船としての性格と「二隻」で描写されるという共通点から、m'yがm'ndtとmsktという二隻の船と捉えられた可能性は十分にある。いずれの船にも共通して特殊な限定符が利用されていた点も、これらの船が密接な関係にあったことを示している。⁵⁵つまり、本章で示した神的存在の対関係としての「二柱のマアト」の実体は、第一章で論じた側面②「死者の復活に携わる神的存在」との関連を示す「マアト・生命」と「テフヌート・シユー」の対関係だけでなく、側面③「太陽神の二隻の船としての側面」を持つ「m'yの船」と「msktの船・m'ndtの船」の関係からも強調されるのである。

- ① 例えば「アムドゥアトの書」第一時や、*plouvre* 3074 (第一八王朝) *BM. EA10554* (第二王朝)、『*Leiden. AMS SR* (第十九王朝)。
- ② Cortegiani 2007, 305; Bruyère and Kuentz 2015, Pl. 36.
- ③ Bleeker 1929, Fig.3; Seebor 1976, Abb. 23, 24.
- ④ Seebor 1976, Fig. 54.
- ⑤ Bleeker 1929, 60-62.
- ⑥ Yoyotte 1961, 62; Seebor 1976, 141.
- ⑦ プレストッドやバスマンのように、m'yを二柱の神々ではないとする研究者もある(Higo 2019, 443-444)。これは、m'yの語尾やm'の語の強調を示すとする解釈や、m'y「マアトに属する者」のようなニスバ形容詞として解釈することができるためである。いずれの解釈も文法上は可能であり、実際に後者は同様の表記で史料に記される(CT 3.43a)。しかし、全てのm'yの記述にこれらの解釈を当てはめた場合、「死者の書」の図像で示される二柱のマアト女神の描写と明らかな矛盾が生じる。図像で示された二柱の女神や神々の姿は、遅くとも新王国時代にはm'yが二柱の神々として認識されていたことを明示している。
- ⑧ シンクレティズムの詳細についてはHornung 1982, 91-99を参照。厳密な定義や理解については研究者により異なるが、本論説ではルフトの示す「二柱もしくはそれ以上の神々の共存もしくは連携」という広義的な理解にしたがう(Luft 2001, 142)。
- ⑨ Luft 2001, 142.
- ⑩ Altmüller 1975, 71-72.
- ⑪ B2L' B1P' B7C' B1Bo' A1Cより補足。
- ⑫ B1C' B2L' B1P上ではCT 2, 29a-dは省略される。CT 2, 29a-c (B1Bo) jny(y) mht wr(t) pr r pl r mrr.f h3 r v r ssp ib.f m m h w m b3fw nr m N pn「天の雌牛の前にいる者、自身の望みにしたがって天に昇る者、自身の心の望みにしたがって地に降りる者」。⁵⁶このNとしての神に会うために喜びのうちに来る。CT 2, 29b mrr.f ssp ib.fはそれぞれ未完了関係形と解釈した(van der Molen 2005, 1798)。

B7C' G1T' AIC には *wy* に CT 2, 29d: *ink šw* 「私」を *šw* シューである」が記述される。

- ⑬ CT 2, 29g:4 は、木棺資料上の記述のバリエーションから異なる解釈が示される。BIC 上の *šmꜣt* 形とするか、分詞として「私の嘆きのためにアトウムの口から出て来る(風)」とする解釈で *šmꜣt* (Faulkner 1973, 83)。しかし、いずれの解釈にも共通する名詞句としての *šmꜣt* 「私の叫び」の意味が不明瞭である。ここでは、アレクサンダーズムの解釈にしがた *šmꜣt* を名詞ではなく、前置詞であるとし、与格を示す前置詞 *n* の後に接尾代名詞 *šmꜣt* を補足した (Allen 1988, 22; Willems 1996, 469-472)。この補足は、B1Bo' G1T' AIC の代名詞の記述から蓋然性が高いと判断される。

⑭ 続く CT 2, 29h も同様に代名詞を補足したが、ザンデは「私のために風を開いた(アトウムの口)」、「風が開いた(アトウムの口)」、「彼(バー)が風を開いた」と三つの仮訳を示している (Zandee 1974, 63)。

- ⑮ B1C' B2L' B1P には不変化詞 *hw* の直後に前置詞 *r* が置かれ、接尾代名詞が記述されている。B7C' B1Bo' G1T' AIC の記述と BIC の代名詞の記述の傾向をふまえ、接尾代名詞 *hw* を補足した。

⑯ 使役第三子音弱動詞 *šmꜣt* 「転覆させる」の不定詞。ここではモーレンにしたがい、「大地へと落とされる」の意味で解釈した (van der Molen 2000, 542)。

- ⑰ フォークナーは *wy* と双数形として解釈し *wy, sꜣy r-št hꜣt* 「彼らの両方は私の前後に居る」と訳している (Faulkner 1973, 84, 86, n. 13)。「彼ら」は *šmꜣt* でシュー(生命)とテフヌート(マート)を指すが、CT 2, 33j では、両者は「一方は私の内部に」(*šmꜣt*)、一方は私の周囲に」と個別に描写される。加えて、BIC の CT 2, 33j 上 *šmꜣt* と *hw*

が並列して記述されることから、筆者は *wy, sꜣy r-št hꜣt, sꜣy r-št hꜣt* 二つの文章の並列であると解釈した。前置詞 *n* と *r* が重ねて表記されるが、B2L の記述から *n* は誤記であると考えられる。

- ⑱ B2L にしたがって、一人称単数接尾代名詞 *hw* を補足。

⑲ 字義通りには、「混沌の神々の混沌の神々としての」。G1T' AIC では、二回目の *hw* は双数形 *hwꜣy* と記述される。ウィレムズは「この二つのバリエーションの記述が本来のテキストの意味に近いものであり、二柱で一組の *hw* の神々から成る八柱の神々を意図すると考察する」(Willems 1996, 470-471, n. b)。

- ⑳ 通常 *hw* は大地の神アケルを意味するが、ここでは「天」(*pt*) とともに動詞「統合する」*sk* の目的語として記述されることから、大地を指すと考えられる (Faulkner 1973, 85, n. 2)。B1Bo' G1T' AIC には *pt* の記述はない。

㉑ BIC のテキストでは、死者は呪文の所有者 (*Z: Šmꜣt*) という語で示されるが、その一方「私」を意味する一人称単数形の接尾代名詞が数多く記述される。呪文の所有者は「彼」であるため、記述上の「私」とは別の存在であるはずである。この代名詞の「私」は所有者である「彼」の誤記なのだろうか。この代名詞の混在に関連して、呪文第八章の特殊な構造について、ウィレムズが一つの興味深い仮説を提示している。彼によれば、呪文の内容はその他の「変身の呪文」と同じく、シューやシューのバーになることを目的とする呪文であるが、この呪文で変身するのは、呪文の所有者ではなく、儀式において呪文を朗唱する朗唱者であるという (Willems 1996, 273-286)。この呪文の本質は、シューへと姿を変えた朗唱者が、アトウムと同一視される呪文の所有者を保護することにあるというのである。確かにこの仮説もまた、呪文中の「Zはシューのバーである」といった明白な「呪文の所有者=シュー」の描写との矛盾を抱えている。しかし、この呪文を

従来のような「呪文の所有者」シユー」の構造で理解した場合、呪文の所有者がシユーと姿を変えたとしても、シユー自身が復活するような明確な描写は見受けられない。むしろ、この呪文において復活や永遠の生命が示唆されるのは、シユーとテフヌートによる保護を受けたアトウムであるといえる (CT 2 32b)。さらに、ウィレムズは呪文第八三章に朱書で示される題目が、一連の呪文で描写される「シユー＝朗唱者」と「アトウム＝呪文の所有者」という埋葬儀礼中の役割を示していることを考察する (Willems 1996: 277)。この解釈に基づいた場合、呪文中の「私」は、シユーへと変身し、死者と同一視されるアトウムを保護する呪文の朗唱者を指す代名詞として理解できる。儀式の呪文としての呪文第八十章の位置づけとその内容の考察については、稿を改めて論じることとした。

²¹ ウィレムズは、シユーを取り巻く息が「開く」ことでシユーが移動する道の上で呼吸できるようにすると解釈する (Willems 1996: 472, n. r)。

²² *im* は「肌」や「色」を意味するが、この意味は不明瞭である (Zandee 1974: 63; van der Molen 2000, 40)。CT 2 29f-g との内容の類似から、シユーが衣服のように身にまとう神的な要素であることを暗示する可能性がうかがえる。

²³ *ihb* は字義通りには「薄明り」を意味する。嵐と並んで記されることからフォークナーにしたがい、雲行きを意味する語と解釈した (Faulkner 1973, 86, n. 9)。

²⁴ フォークナーは「不明な語」とするが、モーレンやニョルドは字の「コフィン・テキスト」上の事例としてこの節の出典のみを示しながらも「唾液」としている (Faulkner 1973, 83, 86, n. 12; van der Molen 2000, 2; Nyord 2009, 321)。一方で、ザンデは「望む」を意味する語 *bi* に由来する語であり、精液を示唆する語であるとしている

(Zandee 1974: 69)。文脈や()の限定符から判断した場合、アトウムからの流出物であるとする蓋然性は高い。アレンは「彼の唾液を止めた(者)」と解釈するが、*b* を「止める」を意味する動詞とする点や、(の)一文字のみで「唾液」とする点には疑問が残る (Allen 1988, 22)。

²⁵ この *bi* は *s* に対応し、体の前側を意味する (Nyord 2009, 79)。

²⁶ CT 2 32h の記述との関係から、シユーとテフヌートを指すと考えられる。フォークナーは両者をマートとテフヌートである可能性を指摘している (Faulkner 1973, 86, n. 14)。しかし、この呪文の中で同一の存在として示されるマートとテフヌートが同時に登場していると考えるのは難しい。

²⁷ 各呪文の内容の翻訳と解釈の詳細については Faulkner 1973; Zandee 1974, 72-87; Allen 1988, 14-27; Willems 1996, 270-323, 469-473 を参照。特に Willems 1996 では木棺資料上の記述のバリエーションや木棺資料の出土地、史料の推定年代を踏まえ、テキストの内容をめぐる綿密な考察をおこなっているが、本論説では文章の意味に直接関係する問題点を中心に議論する。

²⁸ 呪文の内容は CT 2, 43b まで続く。アレンによれば、呪文第八十章は呪文第七章から七十九章までの創造神話を要約し、その内容を更に発展させたものである (Allen 1988, 24)。

²⁹ パーは人間や神々の人格を表す非物質的な概念である。しばしば「魂」と訳されるが、厳密に現代の言葉に当てはめることは難しい。数多くの史料の中でパーは死者の人格として来世と現世を行き来する役割を果たすが、「コフィン・テキスト」では、神々の本質的な部分として登場し、死者と同一視される。パーの意味や広範な役割については Allen 2001; 吹田 1991 を参照。

³⁰ *nhb* と *dt* の概念については、アスマンがその本質を明瞭に説明している (Asmussen 1998, 98-106)。

- ① Allen 1988, 22-23: フォークナーは「CT 2, 32e の *m^{it}* の *Righteousness* としてながら、その他の記述をマアト女神として理解している (Faulkner 1973, 83-84)。
- ② マアトとテフヌートの同一視を暗示する記述はその他の呪文にも確認される。例えば、呪文第二二一章の「私はアトウムの息子であり、マアトの仲間である」(*ink s^t im snw n m^t*) は、自身をシューであるとする述べる死者が、マアトの対をなす存在であることを示すことから、マアトがテフヌートと同一視されていることがうかがえる (CT 2 145b)。呪文第一〇三三章の一部では、多くの木棺資料上で *m^t* と記される記述が、一部の木棺では *Tmt* と記述される (CT 7 270, *m^t*: B3C, B12C, B13C, B6C, B4L, B1Bo, B2Bo, B4Bo, *Tmt*: B1L, B2L, B3L, B1C, B2P)。
- ③ 欠落により判読できない箇所であるが、CT 6 220 上に同様の記述が確認されることから、他の研究者にしたがい、ホルスを補足した (Faulkner 1977, 195; Bargeat 1986, 67; Carrier 2004 1402-1403)。
- ④ テキストは、リシュト出土の欠損の多い一点の木棺に確認されるのみである。ホルスとセトによる王位を巡る争いの神話的描写が多い点や、文字の記述法が従来のテキストと異なることから、呪文の内容には理解の困難な点も多く残る。
- ⑤ 各節で示される同一関係が前置詞 *n* によって示されるため *m makt* であるとした。文字の重複によりいずれか一方の *n* が省略されていると考えられる。
- ⑥ M36 上の CT 6, 124b, 124c はそれぞれ CT 6, 123k, 123j の重複である。この呪文では、いずれの史料でも同一関係を示す一節の重複が度々見受けられる (CT 6, 123-125)。
- ⑦ M36C を除く三種のテキストには *mky* に前接して不変化詞 *tw* が記述される (CT 6 124e)。
- ⑧ 字義通りには「両腕を伸ばす者」。神聖な隼の姿を持つ神である (LG 7, 525)。
- ⑨ 九柱神を意味する *psdt* が双数形で示されるため、二柱の神として両眉毛に対応することは明らかであるが、具体的にどの神を指すかは不明である。
- ⑩ もしくは *Idmwy* (Gardner 1957, 463; Carrier 2004, 1706-1707)。
- ⑪ 類例の少ない抽象的な名詞であり、その詳細は不明である。文脈上シューとテフヌートを指す「双子」やイシスとネフティスの姉妹とは異なる神々として記されることのみがわかる。LG では「二人の娘」とされるが、付記される限定符が男神であるため、性別も不明である (LG 6, 113)。
- ⑫ 呪文の冒頭部においてこの神は以下のように形容される: *nfr hr nb nwyw s n hnpw sk Pph Str rdi n n f Sw s w nfr hr imy ntw* 「顔(その)善い者、二つの目の主、アスビスが繋ぎ合わせた者、プタハ・ソカルが昇らせる者、シューが支えを与えし者、神々の中にいる顔つきの善い者」(CT 6, 123b-f)。
- ⑬ 呪文の後半部分で語られる *shk sw* 「汝が彼(死者)をアクにせんことを」(CT 6, 125a) から、死者の復活に関わる神として描写されていることがうかがえる。
- ⑭ この神に関して冒頭部で示される「顔つきの善い者」(*nfr hr*) は、しばしばオシリスの別名として利用されるが「コフィン・テキスト」の他の事例では、プタハもしくはプタハ・ソカルを指す (LG 4, 214-216; CT 6, 267j; CT 1, 249g)。
- ⑮ CT 6, 391a-c: 呪文の題目は「墓場で彼のためにアクの肉体を繋ぎ合わせる」(*dmd wt n f m hr nfr*) であり、オシリスの復活を示している (CT 6, 391a)。
- ⑯ Altenmüller 1975, 71.

④⑦ 「ハラミッド・テキスト」を神としての「二柱のマアト」の初出とするアルテンミューラーの解釈の妥当性については、Higo 2019: 肥後2020で議論している。呪文第二六〇番の *mḥ* が二柱の神々ではない可能性を追認する史料として、新たにアレシスによる CT 8 上の LJMHI のテキストを提示しておきたい。これはリシュトにある中王国時代のイムヘテブの埋葬室に刻まれたテキストである (CT 8, ix: Arnold 2008, 37, Pl. 60)。ついで刻まれた呪文第二六〇番 G Pyr. 317b はウニスのテキストにある *ḥm* (*mḥ*) が、*ḥm* (*mḥ*) と記される (CT 8, Pt 260)。これは、遅くともテキストが書き手によって刻まれた中王国時代において、呪文の *mḥ* が *ḥm* の双数形ではなく、ニスバ形容詞として認識されていたことを意味する。

④⑧ CT 7 279: Higo 2019, 452-453, Fig. 2.

④⑨ アスマンは *mḥ* を「太陽時間」、*ḥt* を「オシリス時間」であると説明している (アスマン 1997, 104-105)。

⑤⑩ テフヌートは、シューと並ぶ世界の創造に関わる女神であるが、その特徴については十分に語られていない (Tobin 2001)。アレシスは現世における空気がシュー、下界における空気がテフヌートであった可能性を提示している (Allen 1988, 9)。テフヌートの語源について、ビッケルは「吐き出す」を意味する動詞 *ḥs* と同様の意味を持つ動詞 *ḥn* に由来し、*ḥs* とシュー (*Sw*) が示す類韻 (assonance) に対応して考案されたのではないかと推察する (Bickel 1994, 168)。このような類音関係を示唆する記述は「コフィン・テキスト」呪文第三三一章中の表現からも確認される: *sk wī m ḥ ḥsk ḥn' ḥnk sw pw ḥn' ḥḥn* 「私が汝の唾 (*ḥs*) と汝の唾液 (*ḥn*) を探し求めていた (時に)。それはシューとテフヌートである」(CT 4, 174f-g)。

⑤⑪ 古王国時代の教訓文学である「プタハヘテブの教訓」には、次のよ

うに記されている: *wr mḥ' wḥ spdt s n ḥm .(w)s dr tk Wst* 「マアトは偉大であり、その鋭さは永続する。それはオシリスの時代から阻害されることがない」(p-Prisse, 88-89; *wn plwy mḥ' wḥ-s(y)* 「終わりの来るとき、マアトは永遠である」(p-Prisse, 97)。また、中王国時代の「雄弁な農夫の物語」の一節には、次のようにマアトの特徴が語られる: *ḥrt(ḥ) ḥt ḥf nḥ nḥt nḥ(w) r .f'w swt mḥ' r mḥ ḥ's m n' .ḥr s (y) r br-nḥ* 「悪事をなすことにお気をつけください。善い者の善い」とは、彼よりも善いのです、なぜならマアトは永続的であり、それはマアトを行う者とともに墓に行くからです」(p-Berlin 3023, 337-339)。

⑤⑫ この特徴は、「ダチョウの羽根」が *ḥm* の記号として記される一方で、この文字で *sw* という表音文字として利用されることに由来する。実際にシューの名前が史料上に記述される場合、およそ全ての場合において *ḥ* の文字が利用される。

⑤⑬ 例えば Pyr. 210a-c, 335b-c, 485b, 932a-934, 1313a; CT 1 54c-d, 184g; CT 5 172a; CT 6 197c.

⑤⑭ 「パレルモ・ストーン」のネフェルイルカラーの事績欄には次のような記述が確認される: *ḥ(ḥ) nsw-bt' .sḥ' mḥ' r knbt ns nsw-bt Nḥ-ḥ-k' .ḥn' f m mḥw' [u] R' ḥr(?) m st (ḥb) R' ḥm(?) mḥ 8 mskt ḥnd* 「上下エジプト王の出現。 *mḥ* の船の……南の角での建立。上下エジプト王、ネフェルイルカラー、彼は彼の遺産としてラー・ホルス(?) に「ラーの心臓の座」で……ハキュビトの *mskt* の船、*mndt* の船……を与えた」(PS v. v. 2)。不明瞭な点が残されるため、意味の特定は容易ではないが、冒頭の「*mḥ* の船の建立」という行事の内容が続く文章で説明されているとすれば、*mḥ* の船と *mskt*・*mndt* の船は緊密な関係にあったことが理解される。

⑤⑮ Anthes 1957, 82-83.

4 おわりに

本稿では、古代エジプトの「二柱のマアト」研究の一つとして、エジプト古王国時代から中王国時代にかけての *mꜣt* の意味の変遷の考察を基盤とし、中王国時代までに形成された「二柱のマアト」の実体の解明を試みた。第一章では、これまでの *mꜣt*/*mꜣt* 研究を概括し、古王国時代・中王国時代の *mꜣt*/*mꜣt* が少なくとも三つの側面を持ち合わせることを確認した。第二章では、古王国時代から中王国時代の史料上の *mꜣt*/*mꜣt* の個々の事例が示す文脈上の意味と語末に付記される限定符の図像的特徴の比較・検討をおこなった。その結果、「コフィン・テキスト」上の *mꜣt* の記述には、文脈上「二柱のマアト」という神的存在を示す事例に乏しいものの、明らかに神的存在として言及されていない *mꜣt* の記述でもマアト女神や一般的な男神の限定符が付記されていることを発見した。文脈上 *mꜣt* が明らかに「太陽神の船」や「ソカルの船」を意図する場合でも、古王国時代の史料に見られる船の限定符はもはや利用されていない。このことから、古王国時代に変化した *mꜣt* の語の認識が再び変化した可能性が指摘される。「ピラミッド・テキスト」の時代には明確な神の姿を持たなかった「二柱のマアト」は、中王国時代において、その語が文脈中で示す本質的な側面に関わらず「二柱のマアト女神」や「二柱の神」として理解されることとなった。筆者は、この時代に明確に認識された二柱の女神が、その後の「死者の書」で図像化される「二柱のマアト」のイメージの形成につながったと考察する。

第三章では、中王国時代において明確に女神として認識された「二柱のマアト」の実体を解明するため、「二柱のマアト」との関係が予想される神々との習合関係に注目した。「コフィン・テキスト」に記された「マアト」と「生命」の二つの要素で構成される一組は、世界創造における原初の神々である「テフヌート・シユー」、古代エジプトにおける二種類の「永遠」の概念「*dt*・*nḥh*」と同一であることが記される事例 (i)。また、事例 (ii) の内容からは、「テフヌート・シユー」は、ホルスの「右目・左目」および太陽神の船「*mskt*・*mꜣt*」と同一視された。さらに事例 (iii)、事例

(iv)においてこれらの関係は追認され、結果として「マアト・生命」の対関係は「テフヌート・シュー」、「*ḥt*・*nḥh*」、「右目・左目」そして「*mskt*・*m'ndt*」との同一関係を形成することが確認された。これらの事例はいずれも「二柱のマアト」(*m'ny*)との直接的な関係を示してはいない。しかし、いずれの関係も二つの要素により構成される一組として描写されること、多くの対関係が明確にそれぞれの構成要素のなかに「死」と「生」の性格を持つこと、そして *mskt*・*m'ndt* の船と *m'ny* の持つ太陽船の側面との特徴の一致を踏まえると、呪文第八十章で強調される「マアト・生命」つまり「テフヌート・シュー」の対関係が「二柱のマアト」の実体であり、死と生を包括した複数の習合関係を形成していた蓋然性は高いといえよう。セピの木棺(B10)の *m'ny* の語に付記された男性とマアト女神の限定符の組み合わせは、アルテンミューラーと異なる点から彼女の試論を支持し、*m'ny* がテフヌートとシューのような女神と男神の一組として認識されていたことを示している。さらに、「二柱のマアト」が太陽神の二隻の船 (*mskt*・*m'ndt*) と関連を持つ「テフヌート・シュー」と認識されたことにより、太陽神の船の側面を示す *m'ny* の語が「二柱の神々」として認識された可能性も考えられる。

以上から、先行研究によって議論されてきた「死者の書」で描写される「二柱のマアト」の祖型は、「死」の側面をもつマアト女神と、「生」の側面をもつ男神シューからなる一組であったことがうかがえる。「コフィン・テキスト」が利用される中王国時代において既に、「二柱のマアト」は、古代エジプト人の二元論的思考に基づき、複雑でありながらも一貫した形で明確に形成されていたのである。

最後に、以上の考察は、古代エジプト史の前半期における「二柱のマアト」の実体とその変遷を探究したものであり、今後の研究において新王国時代以降の史料の詳細な分析の成果と組み合わせることで、古代エジプト史における「二柱のマアト」の通時的な実体を解明することが期待される。そして、最終的には本論説で提示したマアトと「死」の関係性など、古代エジプト文化の中心にありながらも依然として不明な点を残すマアトの概念の理解を深めたい。

要旨

- CT 1-7 de Buck, A. 1935-1961, *The Egyptian Coffin Texts*, 7 volumes, Chicago.
 CT 8 Allen, J. P. 2006, *The Egyptian Coffin Texts, Volume 8: Middle Kingdom Copies of Pyramid Texts*, Chicago.
 LCG Leitz, C. 2002-2003, *Lexikon der ägyptischen Götter und Götterbezeichnungen*, 8 volumes, Leuven.
 Pyr. Sethe, K. 1908-1922, *Die altägyptischen Pyramidentexte nach den Papirusdrucken und Photographien des Berliner Museums*, 4 volumes, Leipzig.

参考文献

- Allen, J. P. 1988, *Genesis in Egypt: The Philosophy of Ancient Egyptian Creation Accounts*, New Haven.
 Allen, J. P. 2001, "Ba" in D. B. Redford (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Volume 1, Oxford, 161-162.
 Allemüller, B. 1975, *Syncretismus in den Sargtexten*, Wiesbaden.
 Anthes, R. 1957, "Die Sonnenboote in der Pyramidentexten," *ZfS* 82, 77-89.
 Arnold, D. 2008, *Middle Kingdom Tomb Architecture at Lish*, New Haven.
 Bagnuet, P. 1986, *Textes des Sarcophages égyptiens du Moyen Empire*, Paris.
 Carrier, C. 2004, *Textes des Sarcophages du moyen Empire égyptien*, Volume 1, 2, Monaco.
 Bickel, S. 1994, *La Cosmogonie égyptienne: avant le Nouvel Empire*, Fribourg.
 Bieker, C. J. 1929, *De betekenis van de egyptische godin Ma-at*, Leiden.
 Bourbouis, J. F. 2010, *Egyptian: An Introduction to the Writing and Language of the Middle Kingdom II: Sign Lists, Exercises and Reading Texts*, Leuven.
 Brügge, B. and Ch. Kuentz 2015, *La Tombe de Nakh-Min et la tombe d'Ahi-Néfer (N°291 et 290)*, Seconde édition, Le Caire.
 Cortegiani, J. P. 2007, *L'Égypte ancienne et ses Dieux: Dictionnaire illustré*, Paris.
 Edel, E. 1955, *Altägyptische Grammatik*, Volume 1, Roma.
 Faulkner, R. O. 1972, 1977, Faulkner, R. O. 1973, *The Ancient Egyptian Coffin Texts*, Volume 1, 2, Oxford.
 Gardiner, A. H. 1957, *Egyptian Grammar. Being an Introduction to the Study of Hieroglyphs*, 3rd Edition, Oxford.
 Goldwasser, O. 1995, *From Icon to Metaphor: Studies in the Semiotics of the Hieroglyphs*, Fribourg.
 Higo, T. 2019, "Transitions of the Egyptian concept of m'w," *Bibliotheca Orientalis* 76 (5-6), 443-455.
 Hornung, E. 1982, *Conceptions of God in Ancient Egypt: The One and the Many*, translated by Baines, J., London.
 Hussein, R. B. 2017, "Text Transmission or Text Reproduction? The Shifting Materiality of Pyramid texts Spell 267," in S. Bickel and L. Diaz-Iglesias (eds) *Studies in Ancient Egyptian Funerary Literature*, Leuven, 295-329.

- Lesko, H. L. 2003, "Nubian Influence on the later Versions of the Book of the Dead," in Z. Hawass (ed.), L. P. Brock (col.), *Egyptology at the Dawn of the Twenty-First Century. Proceedings of the Eighth International Congress of Egyptologists, Cairo 2000*, Volume 1, Cairo, 314-318.
- Luft, U. H. 2001, "Religion," in Redford, D. B. (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Volume 3, Oxford, 130-145.
- Nyord, R. 2009, *Breathing Flesh: Conceptions of the Body in the Ancient Egyptian Coffin Texts*, Copenhagen.
- Piankoff, A. 1957, *Egyptian Religious Texts and Representations, Volume III: Mythological Papyri*, New York.
- Seeber, C. 1976, *Untersuchungen zur Darstellung des Totengerichts im Alten Ägypten*, München.
- Tobin, V. A. 2001, "Tefnut," in Redford, D. B. (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Volume 3, Oxford, 362-363.
- van der Molen, R. 2000, *A Hieroglyphic Dictionary of Egyptian Coffin Texts*, Leiden.
- van der Molen 2005, *An Analytical Concordance of the verbs, the Negation and Syntax in Egyptian Coffin Texts*, Volume 2, Leiden.
- Willems, H. 1996, *Coffin of Hegata (Cairo Jde 36418) A Case Study of Egyptian Funerary Culture of Early Middle Kingdom*, Leuven.
- Willems, H. 2001, "The Social and Ritual Context of a Mortuary Liturgy of the Middle Kingdom," in H. Willems (ed.) *Social Aspects of Funerary Culture in the Egyptian Old and Middle Kingdom*, Leuven, 253-372.
- Yoyotte, J. 1961, "Le Jugement des Morts dans l'Égypte ancienne," in Edition du Seuil (ed.), *Le Jugement des Morts: Égypte ancienne-Assour, Babylone-Israel-Iran-Islam-Inde-Chine-Japon*, Paris, 15-80.
- Zandee, J. 1974, "'Sargtexte, Spruch 80 (Coffin Texts II 27d-43)," *ZAS* 101, 62-79.
- Zago, S. 2017, "Classifying the Duat: Tracing the Conceptualization of the Afterlife between Pyramid Texts and Coffin Texts," *ZAS* 145 (2), 205-218.
- 吹田浩 1991, 「古代エジプトの宗教人間学考——『ネーを例じし』, 『史泉』, 第73巻, 1-11.
- 肥後時造 2018, 「『コフィン・テキスト』における『柱のプラト』 (M'ry), 『オリエンタル』, 第60巻, 157-168.
- 肥後時造 2020, 「古代エジプトの『ミラミッド・テキスト』における田々, 『史泉』, 第130-131巻, 1-15.
- ヤン・アスマン (著)・吹田浩 (訳) 1998 「エジプト——初期高度文明の神学と信仰心——」, 関西大学出版.

本研究の一部は日本学術振興会特別研究員奨励費 (20J00207) および科学研究費助成事業 (21K13117) の助成を受けたものである。

(日本学術振興会特別研究員)

Ancient Egyptian Goddesses Dual Maat: An Exploration of the Evolving Conception and Its Essence

by

HIGO Tokihisa

Dual Maat (Mꜣ'ty) are the Ancient Egyptian goddesses who personified the abstract Egyptian concept of maat (mꜣ't). These two goddesses had an impact on ancient Egyptian beliefs as they appeared in the scene of the judgement of the dead that forms one of the core themes of the Book of the Dead. They appear in various forms, such as the dual goddesses, a pair of male and female gods, or a single goddess with two feathers on her head. The essence and reason for the transformation of Dual Maat have not been fully understood, although scholars have focused on their iconography and descriptions in the Book the Dead.

Given this background, the author has returned to sources from the Old and Middle Kingdom prior to the Book of the Dead, which he had dealt with in previous works, and proceeded to analyze the origin and cases of the transformation of the concept of Dual Maat before the New Kingdom. Based on these findings, he considers changes in the meaning of the word mꜣ'ty through a comparison of the meanings and determinatives of the word, which suggest there was a change in the interpretation of the word around the Middle Kingdom. Moreover, the paired relationship involved in Maat, attested in the Coffin Texts, indicates a clear notion of Dual Maat as a pair formed by two divinities that is depicted in New Kingdom sources had already developed in the Middle Kingdom.

Key Words; Ancient Egypt, Maat, Religion, Dual Maat, Coffin Texts